

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 27 日現在

機関番号：32602

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2013

課題番号：24720114

研究課題名(和文) 『出雲風土記抄』の見直しを中心とした『出雲国風土記』写本系統の研究

研究課題名(英文) Text Transmission from Hinomisaki Manuscript of Idumo no Kuni Fudoki to Idumo Fudoki Sho

研究代表者

伊藤 剣 (ITO, Ken)

亜細亜大学・経営学部・講師

研究者番号：70453991

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円、(間接経費) 330,000円

研究成果の概要(和文)：『出雲国風土記』の写本には2つの系統があるとされている。本研究で調査研究の対象にした日御碕本『出雲国風土記』と『出雲風土記抄』は、別々の系統だと説明される。しかし、この点に疑義を呈したのが本研究である。調査の結果、『出雲風土記抄』が日御碕本の訓読に基づいて風土記本文を作っている例が存在していた。そのため、日御碕本と『出雲風土記抄』は別々の系統の風土記本文を伝えているのではなく、近い関係にあるという結論を得た。

研究成果の概要(英文)：Text Transmission from Hinomisaki Manuscript of Idumo no Kuni Fudoki to Idumo Fudoki Sho

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：日本文学

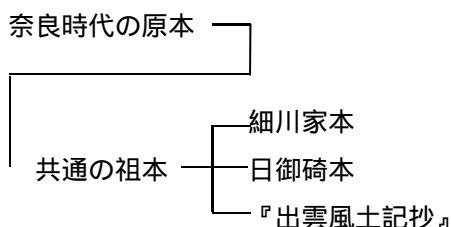
キーワード：出雲国風土記 出雲風土記抄

1. 研究開始当初の背景

本研究は、『出雲国風土記』の写本を調査・検討することで、従来の『出雲国風土記』の写本系統に対する見解に再考を促すものである。

『出雲国風土記』は天平5年(733年)に完成した地誌であり、出雲国各地の地名起源譚や産物記事などで構成される。もっとも、『出雲国風土記』の完成当時の原本は既に失われてしまっている。成立から現在まで1300年近い期間があると、書写の過程で多くの誤写が生じてしまうのは自然なことだろう。そこで、多くの写本を比較して校訂本文を作り、原本の内容を想定することになる。このように、『出雲国風土記』を研究する上で、写本の調査は欠かすことのできない重要なものとなる。

現在の『出雲国風土記』の研究では、書写年代が明記される中で一番古い細川家本(1597年)が最重視されている。これに、島根県の日御碕神社が所蔵する写本(1634年。尾張徳川家からの寄進。以下、日御碕本)など多くの写本が校合の対象となり、比較検討される。その中でも無視しえない比較対象とされているのが、『出雲風土記抄』(1683年)である。『出雲風土記抄』は、出雲国松江藩士の岸崎時照の手による『出雲国風土記』の注釈書である。これまでに名前を挙げた3書は次のような関係とされている。



図示したとおり、細川家本と日御碕本は近い関係にあるが、両本と『出雲風土記抄』は

別系統だと考えられている。『出雲風土記抄』が重視されているのはこのためである。しかし、細川家本・日御碕本・『出雲風土記抄』を仔細に比較すると、「細川家本 日御碕本 = 『出雲風土記抄』」という構図が『出雲国風土記』の中に万遍なく見られることに気付く。この現象は、これまでの研究史の中で重視されてこなかった。

日御碕本と『出雲風土記抄』が近い関係にあるならば、従来の写本の系統図にも疑問が生じてくる。そのため、『出雲国風土記』の写本系統の検討にあたり、日御碕本と『出雲風土記抄』の関係を整理しなければならないのである。

以上が本研究の背景である。

2. 研究の目的

本研究は、写本調査に基づき、『出雲国風土記』の校訂本文を作る上で重んじられている『出雲風土記抄』の位置付けを問い直すことに目的がある。日御碕本と『出雲風土記抄』が密接な関係にあることを明らかにする本研究の目的が達成されると、『出雲国風土記』の研究をする際に『出雲風土記抄』に頼りすぎることの危険性が浮き彫りになる。これにより、現在の研究状況に警鐘を鳴らすばかりでなく、これから『出雲国風土記』の校訂本文を作成していくにあたっての基本的な手続き方法までもが、根本的な見直しを迫られることになる。

3. 研究の方法

日御碕本や『出雲国風土記』といった本研究における重要写本は、島根県に残されている。また、島根県庁にある古代文化センターでは、日御碕本や『出雲風土記抄』以外の諸

写本の写真も確認することができる。そのため、各写本や写真を所蔵する神社・機関での現地調査や、その後の検討を中心に本研究を進めた。

一般に、写本間の関係を検討する際は、読み仮名や返り点などを除き白文化した部分に着目することになる。報告者もこの方法の重要性に疑義を差し挟むつもりなどは毛頭ない。ただし、報告者はこのような方法ばかりでなく、次の視点を前面に出した研究方法をとった。

『出雲国風土記』は平仮名や片仮名のなかった時代に成立した文献であり、風土記本文は漢字のみで記されている。『出雲風土記抄』の特徴は、このような本文に対し、傍訓や送り仮名（以下、捨仮名）などを付すことで訓読が試みられている点に求められる。ただし、『出雲国風土記』本文の全体にわたって訓を施した最初の写本は、日御碕本である。そのため、日御碕本と『出雲風土記抄』の関係を問題にする本研究では、両書に共通した特徴である風土記本文の訓読という点に重点を置いた方法をとることにした。この点に本研究の独自性がある。

4．研究成果

3．研究の方法に記したとおり、訓読という点に重点を置いて日御碕本と『出雲風土記抄』を比較検討した。その結果、次の2点を確認することができた。

(1)日御碕本の傍訓が新たな風土記本文を作った

日御碕本には、ほぼ全巻にわたり風土記本文の訓が記されているが、日御碕本書写者の誤った本文理解に基づいて傍訓が付されて

いる箇所もある。出雲国内には日御碕本を祖にもつ写本（以下、日御碕本系統の写本）が多数存在する。それらの写本の調査を進めると、日御碕本の誤訓に引きずられた結果、風土記本文の漢字が改められている例のあることが分かった。このように、日御碕本の傍訓は新たな風土記本文を作り出しているのだ。

本研究で注視したのは、このような日御碕本系統に見られる傾向が『出雲風土記抄』にも認められる点である。つまり、日御碕本書写者の誤読という過程を経なければ生まれえなかった風土記本文が、『出雲風土記抄』にも存在するのである。この点は、『出雲風土記抄』が日御碕本の影響下に置かれていることを示す具体例になる。

(2)日御碕本の捨仮名が新たな風土記本文を作った

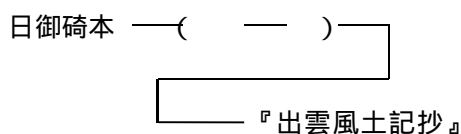
繰り返しになるが、日御碕本では『出雲国風土記』の訓読が試みられており、漢字に対する捨仮名も記されている。この内、「～ノカタ」と訓ませるべく、捨仮名として「方」の字を記す場合がある。日御碕本系統の諸写本を見ると、もともと捨仮名として小さく書かれていたこの字が徐々に大きく書かれるようになり、さらには風土記本文として混入するに至る傾向が認められる。つまり、日御碕本以降には捨仮名の本文化という問題が生じるのである。

ここで『出雲風土記抄』を見てみると、日御碕本が捨仮名として記した箇所ですべて「方」の字が本文として記されている。日御碕本系統の写本で起こった現象を参考にすれば、『出雲風土記抄』のような風土記本文の形は、日御碕本系統の写本を目にしていることを前

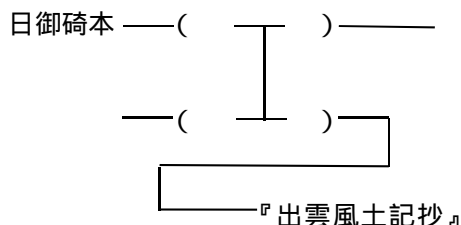
提にしなければ説明できない。

以上の2点から、日御碕本と『出雲風土記抄』には明らかな親縁性が認められるのである。つまり、日御碕本と『出雲風土記抄』は別々の系統に属しているのではなく、近い関係にあると考えられるのだ。両書関係をより具体的に示すと、次の2とおりの可能性が考えられる。

『出雲風土記抄』の祖になった本が日御碕本系統に属していた場合



日御碕本と『出雲風土記抄』の祖になった本が別系統に属していた場合



()内の の数は不明

上の2案のうち、前者は日御碕本と『出雲風土記抄』との間に直系の関係を認めるものである。この場合、両者に親縁性が認められるのは当然のことだ。一方、後者であっても日御碕本と『出雲風土記抄』との親縁性を説明することができる。すなわち、日御碕本とは異なる系統の写本を祖に持ちつつも、『出雲風土記抄』以前のどこかの時点で日御碕本系統の写本により校合をした結果だと考えるのである。この場合、別々に存在していた2つの写本の系統が1つに統合されてしまったことになる。

現在のところ、「細川家本 日御碕本 = 『出

雲風土記抄』」となっている箇所では細川家本を採用しないときは、「『出雲風土記抄』に従った」というように説明される。しかし、『出雲風土記抄』が日御碕本の影響かに置かれている以上、細川家本や日御碕本とは別系統の写本による保証という従来の概念自体が揺らいでしまうのである。

『出雲国風土記』の写本系統を考える際は、日御碕本から『出雲風土記抄』へと向かう流れを考慮に入れねばならない。本研究は、これまでの研究手続きに対する根本的な見直しを迫るものである。今後の『出雲国風土記』の研究では、傍訓や捨仮名までを含めた総体としての日御碕本の姿を視野に入れる必要がある。

5. 主な発表論文

〔雑誌論文〕(計2件)

伊藤剣「日御碕本『出雲国風土記』の訓読が作った風土記本文」『早稲田大学日本古典籍研究所年報』7、早稲田大学プロジェクト研究所日本古典籍研究所、2014年3月、査読無

伊藤剣「日御碕本『出雲国風土記』から『出雲風土記抄』へ 捨仮名の本文化に見る写本系統の再検討」『上代文学』112、上代文学会、2014年4月、査読誌からの依頼原稿

〔資料紹介〕(計1件)

伊藤剣「文化三年写中島家本『出雲国風土記』について」『嵐義人先生古稀記念 文化史史料考証』アーツアンドクラフツ、2014年7月刊行予定、依頼原稿

〔学会発表〕(計1件)

伊藤剣「日御碕本『出雲国風土記』から『出雲風土記抄』へ 捨仮名の本文化に見る写本系統の再検討」、平成 25 年度上代文学会秋季大会シンポジウム、2013 年 11 月 16 日、於・お茶の水女子大学、依頼発表